



図書館講演会

『ネットと生成 AI 時代の情報活用術&世界の図書館をめぐる冒険』

令和6年度後期のイベントとして12月7日(土)に「図書館講演会」を開催しました。梅澤貴典氏をお招きし、昨今話題の生成 AI の存在を念頭に置いた情報活用について、ご自身が旅をした世界の図書館のお話を絡めてご講演いただきました。聴講した学生からは「インターネット上の情報を鵜呑みにしてしまっていたが、一次情報で確認することが重要だとわかった」「お話が面白くて90分があっという間だった」などの感想が多く寄せられました。



秋の学生ブックツアー

春季に続き10月27日(日)に書店で秋の学生ブックツアーを開催しました。学生選書委員が実際に本を手に取り、それぞれ個性ある本を選んでくれました。図書館カウンター前に、紹介ポップと一緒に専用コーナーがありますので、ぜひご覧ください。

【選書抜粋】

- 小説きみの色
- 世界カフェ紀行
- 今宵も喫茶ドードーのキッチンで。
- なぜ地方女子は東大を目指さないのか
- 酒が薬で、薬が酒で
- 今日から変わるわたしの24時間
- 事件現場のソクラテス



『悪文 伝わる文章の作法』 岩淵悦太郎 編著

(ビジネスライフ学科 叶多泰彦 教授)

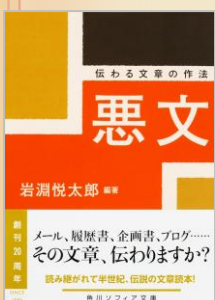
私がおすすめる一冊は、『悪文 伝わる文章の作法』(文庫版)である。レポート出題の際の参考図書としてよく紹介している。文庫版は比較的安価で、特におすすりめである。

編著者の岩淵は国立国語研究所所長も務めた国語学者である。この分野には、『理科系の作文技術』(木下是雄)や『日本語の作文技術』(本多勝一)など、長く学生に支持されるスタンダードがいくつかある。本書もその一つだ。失敗事例(悪文)の検討を通じて、「伝わる文章」とは何かを論じている。一種の事例研究とも見なせる。

文章作成の目的とは何か。小・中・高の国語の授業で文学的な「名文」「美文」のシャワーを浴びてきた学生の中には、文章というのは美麗に飾り付けることが重要と思いついて入る向きもあるかもしれない。「著者の言いたいことは何か」を問う読解の入試問題は、その正答率が低いものであった場合、「分かりにくい」「伝わらない」文章の典型だろう。一方、本書は「分かりやすい」「伝わる」文章とは何かを具体的に論じており、言語・文字によるコミュニケーションのあり方に関する示唆に富む。

「学生のうちに出会っていったら……」と、社会に出てから思うような本がある。本書はそうした本の一冊である。巻末の「悪文を避けるための五十か条」だけでも読む価値が十分にある。学生のうちに購入し、常に手元に置いておきたい。

と、書いてきた私の文章が悪文に該当するかは、本書を参考にご判断を。



先生が選んだおすすりめの一冊



学生が選んだおすすめの一冊

『余命一年と宣告された僕が、
余命半年の君と出会った話』

森田 碧 著

(経営学科 四年 梅野 紗千乃)

私が紹介するのは、森田碧氏のデビュー作品「余命一年と宣告された僕が、余命半年の君と出会った話」という小説である。タイトルから恋愛系統の話だと推測する方もいると思うが、ひと味違っていた。読み進めるうちに、誰もが持っている「人生のタイムリミット」に対してどのように過ごしていくかを考えさせられる内容になっていた。

ストーリーは、高校一年生の早川秋人が心臓病で余命一年の宣言を受けたところから展開していく。秋人は趣味の絵を描くことを楽しんでいて、帰宅途中にみた綺麗な夕日を鉛筆一本だけでスケッチするなど、自身のタイムリミットを悲観的に捉えている姿が目につかなくてくる。そんな秋人が、病院の一室で色鮮やかな天国の様子を描き、「死ぬのは怖くない」と真っ直ぐに話す色白の少女と出会うことで急展開が待っている。

その後、対照的なふたりがお互いを生きる灯火にしながら微かな希望をもってタイムリミットを過ごす様子を見届けて欲しい。



『注文に時間がかかるカフェ』大平 一枝 著

(経済学科 二年 西田 美星)

「注文に時間がかかるカフェ」という喫茶店をご存知でしょうか？私は図書館主催のブックツアーで、海が描かれた美しい表紙の本に出会いました。その時、思わず「注文に時間がかかるのは、スタバのようにメニューが多いから？」と疑問が湧いてきました。この一冊は、吃音に悩む若者が、奥村安莉沙さんが立ち上げた「吃音カフェ」というプロジェクトに挑戦する実話です。吃音がどれほど苦しみを伴うか、私はその当事者の声を聞くまで理解していませんでした。しかし、約二四〇ページにわたる本書では、実際に「吃音カフェ」で働くスタッフが、その苦しみやカフェでの成長を率直に語ります。

私が特に感動したのは、カフェの存在だけでなく、奥村さんの絶え間ない努力です。筆者の大平一枝さんの取材を通じ、彼女が己の睡眠時間を削って、裏方で多くの仕事をこなしていることが物語の上で明らかになります。限りある時間の中で顔色ひとつ変えずに従業員に寄り添う姿には、プロフェッショナルな姿勢と、社会で生きることの厳しさを目の当たりにして、つよく心を揺さぶられました。

吃音症を学び、当事者の声を知るための一冊として、ぜひ手に取って読んでみてください。

企画展示「学び舎に残る歴史-煉瓦棟と千葉の戦跡-」終了
ご来場ありがとうございました！

令和6年5月27日(月)～10月31日(木)に本学園の敷地内に残る「旧鉄道聯隊材料廠煉瓦建築」(通称：煉瓦棟)をテーマに企画展示を開催しました。開催期間中の見学者は約2,000名に及びました。熊谷千葉県知事が見学に来校された他、鉄道や建築関係のお仕事をされている方、煉瓦や戦跡に興味のある方などを含め、多くの方に足を運んでいただきました。



内部を見学する熊谷千葉県知事(中央)と佐久間理事長(右)↑

古本市を開催しました

図書館では11月16日・17日に行われた大学祭・とどろき祭において、古本市を開催しました。教職員の方々に本の供出を呼びかけ、たくさんの本や雑誌を販売する他に、子ども向けにバルーンアートも配布し、両日多くの来場者がいらっしゃいました。売上金については全額、能登豪雨災害義援金として石川県に寄付しました。

